

『十地經』の思想的研究 I

——十地の結節点——

丘 山 新

一、問題の所在

經典の解釈・受容の方法には多様な立場が可能である。しかし孰れにせよ經典成立後の伝統的・近代的諸解釈を通さずに、先ず經典そのものに基づき、可能な限り經典の構造・思想を明確に把握しておくことは、不可欠の作業である。この基本的視點に立脚し、ここに『十地經』そのものの構造・思想を再検討してゆくことが筆者の課題である。本稿では個別的問題に先立つて『十地經』の全体的構想を経自身に沿いつつ考察し、第七遠行地が十地の結節点たる位置を占めていることを明示しようと思う。尚、結節点^(a)とは節目、折れ曲がる点たることを意味し、又それは重要性に関する価値的判斷を与えようと試みるものではない。紙数の制約上、詳論は後日に譲り、骨組みのみを示す。

二、伝統的解釈

筆者の試論に先立ち、伝統的な解釈を参考の為に挙げておく。但し、一般論として後世の諸解釈を参照する場合、後世に与えた影響の力を重視するのではなく、時代的により遡り得る註釈書の解釈の方が新たな思想的要素が入る可能性がより少ないという点に留意すべきであろう。

(a)、まず一般には『十地經論』が考えられるが、坂本幸男博士も既に指摘している如く、その構想の種本ともいふべき『菩薩地持經』による解釈が参照される。そこでは何処を節目とするかに關して特に言及はしていないが、第二地を戒、第三地を定、第四乃至第六地を慧學にあてはめ、伝統的な三學により一組にして捉えている点が注目される。

(b)、『十地經論』は詳細な隨文解釈になっている為、全体的構想に対する考察という点に欠ける。但し、『十地經論』の第六現前地に於ける〈三界唯心〉に対する独特な解釈をはじめ、『十地經』に関する種種なる思想的論争は本論にはじまる。

(c)、更に『攝大乘論』の解釈、則ち第六現前地——無分別智、第七遠行地以降——後得智という理解、又十波羅蜜を前記事項とも関連させて前六波羅蜜プラス後四波羅蜜とする解釈は、特に近代諸學者に對して大きな影響を与えている。

尚、中觀派系統の解釈としては『入中論』等が参照されるが、それはその3/4近くが第六現前地に関する論争に費されており、今の問題には直接には利用できない。

(d)、これらの他、丹念に諸經論を調査すれば十地の全体構想は、幾重にも開合できようが、この問題に関する伝統的な解釈理解は淨影寺慧遠『大乘義章』卷第十四十地義中第三弁地位(大正藏四四、七五〇b乃至七五一b)に集成されている。但し、『攝大乘論』に見られる解釈のみは挙げられていない。

三、近代的解釈

(a)、大別して次の二種がある。第六現前地を結節点とし、且つ価値的にも重視するもの。理由としては、(i)先に述べた般若波羅蜜・

無分別智の重視、(iv)「三界唯心」の一文がこの第六現前地にあらわれていることに拠る等。しかし、これらは明らかに後世の解釈・価値判断に基くものであり、經典そのものには根拠の希薄なものである。

(g)、功用無功用で第七地を重視するもの。L. de La Vallée Poussin (E. R. E. vol. II, p. 748), J. Rahder (Dasābhūmika-sūtra, 7th Stage), H. Dayal (Bodhisattva Doctrine in B. S. L.) 等の解釈である。前者は更にその根拠として滅尽定第七地、無生法忍第八地を挙げている。

しかしこれらの孰れの解釈も、唯一点にのみ著目するに留まり、それを根拠に判断を加える為に恣意的であり、經典全体の構造思想を『十地経』そのものに即して把握した上での判断とは言い難い。筆者が参照した限りに於て、上記の手続きを経た研究は極めて少ない。例えば、玉城康四郎博士の研究はそのひとつといえようが、同博士の解釈は第一、六、八地を十地の階梯の中で価値的に重視しているように思われる。筆者もまた同様の理解に立つものであるが、しかし十地の節目、結節点としては第七遠行地を捉えるべきであろう。

四、試論

その根拠は多様に述べられるが、次の諸点にまとめられる。

(α)、第一に經典の説かれ方の形式上からの問題。第六現前地までは金剛藏菩薩の一方的説法であったのが、第七遠行地に至ると解脱月菩薩が問者として登場し、重要な問答が交わされる。説法の形式上、第八地以降の如來の説法と並んで、第七地の形式は際立つて特色あるものである。

(β)、前記の問答中、第七遠行地をも含めたこれまでの七地が経自

身に依つて略説される。譬喩形式による数種の十地略説を除外すればこの箇処が唯一である。このことは亦、第七地が十段階の中でひとつの節目になっていることを示唆したものといえる。

(γ)、修行項目徳目として、初歡喜地は別として第二離垢地乃至第六現前地は従来の伝統的な修行方法を探り入れて構成されている。

(これは既に『菩薩地持経』の指摘するところであるが、それら項目の意味は空・慈悲の思想に裏付けられて徹底的に利他的なものに改変されて各地に位置づけられており、これは『十地経』に見られる極めて重要な手法の特徴である。)ところが第七遠行地に至るや、菩薩にとつて当為としての修行項目は伝統的なものではなくなる。此処では初歡喜地以来の修行項目を集成した形で、十波羅蜜がとりあげられ、而もそれらは一瞬毎に完成されるとされる。

(δ)、先学によつて指摘されている如く、菩薩の働きの在り方としての無功用が、この地より問題にされる。

(ε)、大乘菩薩の究極的立場といえる(生死即涅槃)〈煩惱即菩提〉という在り方がこの地で完成される。(七—A、七—M、Rahder) この在り方を現存最古訳の『漸備一切智徳経』は〈玄妙道〉と形容し、且つ第七地を玄妙地と意識している。この古訳は三世紀末訳出とされるが、当時の中国思想界の背景を併せ考えれば、明らかにこの〈玄〉、〈妙〉は老子第一章に於ける道の形容に起因しているといえよう。このような形容をうける第七地が、当時の訳出者等に如何に理解されていたかが窺い知れよう。

(ζ)、経自身も亦、第七地を軸として十地全体の二重構造性を巧みな譬喩で示している。この点に関しては、上山春平氏が詳細に考証しておられるので同氏に依る。